時事新報

歐洲列國の大勢（前號の續き）

日耳曼の政略

前號に記したる如く日耳曼の政策は今も今後も依然ビスマルク主義を奉ずるものなりとして偖其列國の關係を考ゆるに日耳曼の國たるや佛蘭西露西亞墺地利の三大國に其腹背を圍せられて歐洲の中央に國を建て境界天然の防衛上に於て强固ならざるのみならず右三大國の中にても佛露の二國は敵にして同盟援けを假るべきは獨り墺地利なるのみなれ共此國の兵力は割合薄弱にして單に助力とあらざるのみ若しも墺國が佛露の攻撃を受るあるともなりとせば日耳曼はこれに兵を假して自から其瀕墜を守らざる可らず千八百七十九年日墺兩國の間に取締びたる同盟條約は即ち此防守の目的に出でたるものにて佛露の兩國若くは其一國が同盟國を攻撃するの場合には互に相援けんとの考あらんと雖も墺國の兵力充分あらざるが故に之を日耳曼の片腕と恃むには足る可らず此外伊太利の如き新强國ありと雖も其關係は中立なれば同盟殿肱とすると難くの他諸小列國の數一にして足らざれ共今日に於ては大國の兵備極先て整頓して一旦事あるも數隊の兵をみれ送り、以て敵國に應援をなすと防ぐと互に容易なるが故に此等の敵味方の算に入るゝに足らざるもれとして獨り日耳曼は恐るべきは佛露の同盟なり嘗て宰相ビスマルクは百方手段を運らし之を打破せんことを計畫せざる可らず然るに昨年の十月露國より佛國に右同盟の議を懸合ひたるに當時の内閣議長フレシネー氏が斷然之を拒絶したるは蓋し氏の深謀にして佛露の同盟は歐洲戰爭の端となり其災害延て佛國に及んで共和政治の顛覆を恐るたるものあらんと雖も尚は佛國は日耳曼に對して七十年の怨を抱き兩國れ軋轢今に干戈を動すの危急に迫るの折柄同時に露國が日耳曼を警敵視するの狀も亦た甚しければ佛露の同盟い愈々成ると成らざるとに論なく何時ある相結んで日耳曼を攻撃するの危險尠きに非ず又露國が墺地利に對するの關係も甚だ切迫なるものゝして東歐に露の羽翼を伸ばさんとすれば勢ひ墺國の利益と衝突するを免る可らず加ふるに墺國の兵力不足なれば露國は常ある之を輕蔑し一朝變起らば露軍進んで直に墺域に落すと容易ありと信ずるが故に之と唇齒の關係ある日耳曼は如何にして墺國の失敗を防ぎ、夫れをして歐洲一大國の位地を喪はざらしめんかと用意苦心尋常ならざる者の如し尤も英國と墺國との關係は親密なるが故に露國若し墺國を攻むるとせば英は必ず露に反對もるに相違あけれ共彌々兵を出して露領を攻撃するまでには少なくも一箇月の時日と費すべく其間に露軍は疾くに墺國に侵入して維納浸路の奇觀なきふしも非ざるべし要もるに交通自在、兵備整頓の今日に在りて戒嚴召集の事甚だ容易にして開戰後一箇月を經るの頃をひにい如何なる戰爭にくも早や勝敗の決着を見るべき者あるに今日の英國人は斯ることよも注目せず悠然一箇月の後ちに非されば其兵を土耳格海岸又上陸せしむる能はざるれ始末には英國の同盟も又墺地利の悔みとはあらざるべ兄あり此の如く墺國れ孤立無援あるは露國の悦びとする所あらんと雖も日耳曼の利害より論ずれば露國の南侵を喰止めて墺國に其版圖を維持せしむると要用あり是れ當時ビスマルクが類りに其計畫を賛もるの由縁あらん

抑も日耳曼の政略にして世人れ最も注目するもれは佛國に對もるの關係即ち是れあり世人は今日にも戰爭の破裂ある如くに想像して所說百端なりと雖も然れ共我輩の所見に於ては兩國ともに用心して成る丈戰端を開うざるれ覺悟なりと信ずるなり蓋し將來永遠戰爭あらんと云ふに非ず何れの日か其交際の破るゝ事もあらんと雖も是れは兩國れ兵力平均を失ふの證迹いよ〳〵判然さるれ場合に限ることにして今日の如く强弱孰れとも決せざる間い互ふ遠慮をて先づ交戰みんと判斷もるの外なし今兩國の兵力を論ずて確かに其優劣を比較すると困難あれ共佛國は現在變に臨んで二百五十萬の大兵を戰場に操出し得るに相違あく人員の點に於ては正に日耳曼を壓倒もるもれありと雖も之を償ふに日耳曼の陸軍は訓練充分ふして軍紀の肅然たるあるが故に雖方の力に於ては强弱優劣なしとして各自國境の守備も亦甚ず嚴重あれば容易に近寄り難しと云へり左れば佛國より日耳曼を攻むるにしてもメッズ、ストラスブルグ若くは又ライン河畔要害の各地にある日耳曼の堡砦は孰れも堅固にして縱令へ露軍の同盟あるも之ふ乘入るふとは覺束あかるべく又日耳曼より佛國を撃つとするも今日ふ在りては路を白耳義に假るに非ざれば一歩も之に踏入ること叶はざる可ふ唯佛日開戰に至らば白耳義は果して嚴正中立を格守して日耳曼の爲めふ其權利を犯されざるの安心ありやと云ふに此問題は白耳義の兵力如何んに關するものにて今日の勢ひ所詮其中立を全うするの見込とあらは明瞭なれ共兎ふ角に日耳曼が他人の邦土を蹈荒らして迷惑を蒙むらしむるまでには多少忍ぶ所もあかる可らず此等の事情よりも考ふるも亦た佛日の戰爭は容易に破裂す可き者に非ず又萬一破裂に至るも其戰爭は互に受身の防戰にて且つ長き月日を要もるものにも非ざるべし何となれば英露の二國は局外の地位と云ひ又日國の力と云ひ充分戰爭を持久するの餘裕ある者あれ共佛日墺伊の四國に至りては戰爭の永曳くほど其災害を蒙りて到底之に堪ゆるの實力なるべけれはなり

次ふ同じく歐洲の問題たる土耳格れ關係を視るに日耳曼の緣故甚ず淡泊なるものふして唯隣國の墺地利が土耳格に對するの利害ありといふと以て日耳曼も亦唯其線を繫がれたるに過ぎざれども他の列國は之ふ反して土國を見ること俎上の肉の如く、切取り横奪勝手次第の有樣なり例へば佛はアルヂエリヤを略取り今はまたモロッコに乖延し伊はトリポリーにアバニヤに其野心を逞うして英はサイプラス嶋を奪ひ又埃及を占領し墺はボスニヤを掠めヘルゼゴビナを侵し露は更にバルガリヤを併せて墺てコンスタンチノープルふ闖入せんともるれ策略のそなれ共日耳曼一國に限りては絶て斯る謀なく專ら手を拱して俎上の肉の爭を傍觀するはビスマルクの政略日耳曼の統一の事業の外に敢て目的あ兄の證跡ある可し唯近來に至りて殖民政略と唱へ南洋れ諸嶋嶼に頻に日耳曼の國旗を立たれ共こが爲め歐洲中他の列國と爭端を開くばせの事件にも至る可らず就中英國人の考に於ては所詮英國の領分に歸せざるの土地あらば之を佛國ふ占領せしひるよりも日耳曼の手に渡すに若かずとの論一般あして英日の間は英佛の如く共殖民政策に衝突を生ずたるの事例も少けれは日耳曼の外交歐洲の部内に於て獨り勢力あるに拘はらず歐洲外には又殆んと無關係と稱して不可

（未完）

官報

○大藏省告示第百二十八號

一七分利付金穀公債元金五百萬圓

右償還ノ爲メ本月中抽籤執行ス

但抽籤ノ都合ニヨリ償還金額ニ多少ノ增減アルヘシ

明治二十年九月六日　大藏大臣伯爵松方正義

（本年九月六日官報）

雜報

○イーストレーキ氏の日本話　東京インデペンデント新聞の持主たりしイーストレーキ氏は此程米國桑港クロニクル新聞の通信者に向ひ日本の事情に付物語りたる一部始終を同新聞ふ掲載せしが今其の概略を抄譯とれば始め氏が同通信者に面會するや曩きに井伊氏より贈與したる橘家祖代の短刀を示して其鋭利と適用を說き夫をより日本社會の進歩に說き及ぼし日本にては著るしく進歩しつゝもれ數多ありと雖も中に尤も變化したるは衣服の事なり殊に皇后の洋服を着せられてより以來一層流行を來たしたるが如く此流行の結果如何なるべ兄かを知らんふは同國上流社會れ有樣に照らして瞭然たるべし日本の婦女子は斯くも洋服を着くるに汲々たるは其意何にあるか容易に忖度ふ難けれども自分に於ては何分感心致し兼ぬる方なり殊に軀幹短小あるる日本婦人には洋服は至て不相當あるに兼て又從來得意の風俗と一切廢棄せねばならぬ譯にて隨て帽子の如きい被るもあり被らぬもあり首尾不揃にて見憎きと夥しく然るに猶之に戀々たるは如何ふも不審の至りあり（此時氏の母は傍におりて其意推して知るべしと云へり）次に學校の事に移りて學生の服裝等を說き夫れより合衆國政府は日本に如何程の勢力あるやの問に答へ日本ふては近頃頻りに日耳曼に法り一も日耳曼二も日耳曼との有樣にて諸官省の建築は凡て日耳曼人の請負ふ積りある由云々又地震の事を說き建築の難易當否を評し次に海防費れ事及び日本の海軍兵士と其精練なること各國比類多からざるべし又米國人の日本人に優待せらるゝことを語り續け米國人れ名稱い日本國内の通行券と云ふて可あり日本人は米國を目して兄弟姉妹の間柄とあすが如く此點に於ては遠く歐洲各國に對するの比ふあ少ず云々と

○露國人民れ無學　我國ふては車夫や婦女子と雖ども大抵町名番地抔の書付たるは先づ見分くる者多ひ事なるが近頃露國に旅行せし人の話に依れば同國人民の無學ふるは誠に驚くべき者なりと云ふ元來此の旅行せし人は英語には通せしも露國れ文字を解せざるより其地にて有名の街衢舊跡を尋る毎に旅店れ主人ふ書付を貰ひ之を便りに到り見んとて此等と思ふ所にて例の書付を出し往來の人ふ問ふも兎角其文字を讀み得る者寡なく止むを得ずして一々警察署に就きて書付を示し僅ふ目的れ所へ行得たりとの事なり

○農具製作所　三田四國町れ同製作所は燒失の後再興れ義を農商務省へ伺ひ中なりしが大臣次官の交迭等にて裁許れ遲びに至らざりしが之を新築再興するも畢竟本年度の經費中より支出すべき譯に至らずされば來る廿一年度四月以降更に再興すべ兄と否とは目下官房に於て詮議中なるよし又同所に於て定雇なりし職工も去る八月卅一日限り悉皆解傭したりといふ

○綿フランネル販賣會社　大坂府下東區備後町の湖組治良七和歌山縣和歌山區の平松芳次郎同瀬戸重助れ三氏を始め外十名の人々は今度綿フランネル販賣會社なるものゝ大坂備後町に設置し東京、京都、和歌山及支那上海に支店と擬き紀州、尾州の兩國に對もるの關係即ち是れあり世人は今日にも戰爭の破裂ある如くに想像して所說百端なりと雖も然れ共我輩の所見に於ては兩國ともに用心して成る丈戰端を開うざるれ覺悟なりと信ずるなり蓋し將來永遠戰爭あらんと云ふに非ず何れの日か其交際の破るゝ事もあらんと雖も是れは兩國れ兵力平均を失ふの證迹いよ〳〵判然さるれ場合に限ることにして今日の如く强弱孰れとも決せざる間い互ふ遠慮をて先づ交戰みんと判斷もるの外なし今兩國の兵力を論ずて確かに其優劣を比較すると困難あれ共佛國は現在變に臨んで二百五十萬の大兵を戰場に操出し得るに相違あく人員の點に於ては正に日耳曼を壓倒もるもれありと雖も之を償ふに日耳曼の陸軍は訓練充分ふして軍紀の肅然たるあるが故に雖方の力に於ては强弱優劣なしとして各自國境の守備も亦甚ず嚴重あれば容易に近寄り難しと云へり左れば佛國より日耳曼を攻むるにしてもメッズ、ストラスブルグ若くは又ライン河畔要害の各地にある日耳曼の堡砦は孰れも堅固にして縱令へ露軍の同盟あるも之ふ乘入るふとは覺束あかるべく又日耳曼より佛國を撃つとするも今日ふ在りては路を白耳義に假るに非ざれば一歩も之に踏入ること叶はざる可ふ唯佛日開戰に至らば白耳義は果して嚴正中立を格守して日耳曼の爲めふ其權利を犯されざるの安心ありやと云ふに此問題は白耳義の兵力如何んに關するものにて今日の勢ひ所詮其中立を全うするの見込とあらは明瞭なれ共兎ふ角に日耳曼が他人の邦土を蹈荒らして迷惑を蒙むらしむるまでには多少忍ぶ所もあかる可らず此等の事情よりも考ふるも亦た佛日の戰爭は容易に破裂す可き者に非ず又萬一破裂に至るも其戰爭は互に受身の防戰にて且つ長き月日を要もるものにも非ざるべし何となれば英露の二國は局外の地位と云ひ又日國の力と云ひ充分戰爭を持久するの餘裕ある者あれ共佛日墺伊の四國に至りては戰爭の永曳くほど其災害を蒙りて到底之に堪ゆるの實力なるべけれはなり

次ふ同じく歐洲の問題たる土耳格れ關係を視るに日耳曼の緣故甚ず淡泊なるものふして唯隣國の墺地利が土耳格に對するの利害ありといふと以て日耳曼も亦唯其線を繫がれたるに過ぎざれども他の列國は之ふ反して土國を見ること俎上の肉の如く、切取り横奪勝手次第の有樣なり例へば佛はアルヂエリヤを略取り今はまたモロッコに乖延し伊はトリポリーにアバニヤに其野心を逞うして英はサイプラス嶋を奪ひ又埃及を占領し墺はボスニヤを掠めヘルゼゴビナを侵し露は更にバルガリヤを併せて墺てコンスタンチノープルふ闖入せんともるれ策略のそなれ共日耳曼一國に限りては絶て斯る謀なく專ら手を拱して俎上の肉の爭を傍觀するはビスマルクの政略日耳曼の統一の事業の外に敢て目的あ兄の證跡ある可し唯近來に至りて殖民政略と唱へ南洋れ諸嶋嶼に頻に日耳曼の國旗を立たれ共こが爲め歐洲中他の列國と爭端を開くばせの事件にも至る可らず就中英國人の考に於ては所詮英國の領分に歸せざるの土地あらば之を佛國ふ占領せしひるよりも日耳曼の手に渡すに若かずとの論一般あして英日の間は英佛の如く共殖民政策に衝突を生ずたるの事例も少けれは日耳曼の外交歐洲の部内に於て獨り勢力あるに拘はらず歐洲外には又殆んと無關係と稱して不可

（未完）

第百四號　國立銀行株券額面百圓　二枚
番號　第九百七十一番　第九百七十二番　岩本平太所有
右紛失ニ付テ本人ヨリ公告ノ願出アリ
明治十九年三月十七日火災ニ罹リ焼失ス
東京市麻布区飯倉町五番地
本校第六回體操傳習員募集ス教員或ハ體育志願者ハ來ル十月八日限リ東京書籍出版ス本校卒業ノ上師範學校中學校教員檢定試驗ヲ受クルヲ得卒業期四ケ月人學試驗ヲ要セズ入學ヲ許ス郵券送附セバ規則書ヲ呈ス
麹町區上六番町
來十日（第四土曜日）午後一時第六十一回小集會相開候間御來會相成度此旨在京會員諸君ニ廣告ス、但當日談話ノ宿題並演題ハ左ノ如シ
（宿題）目下我國ノ米麥作改良ニ切要ナル事項如何（未）
●各公債　諸證書
●古金銀　貨幣　洋銀